

## 「いかに善玉菌を増やすかだと思う 新潟・渡辺秀雄さん」

(現代農業 平成24年10月号『トマト青枯病に挑む』こう読んだ より)

### いかに善玉菌を 殖やすかだと思う

新潟・渡辺秀雄

トマト農家が全力をあげて青枯病を出さない工夫をしていると思った。私もトマト栽培を始めた昭和三十九年から一貫して、病気を出さない工夫をしてきた。結果、いまだ自根で四九年連作ができている。一貫して続けてきたことは、善玉菌を殖やすこと。農薬では、青枯病をはじめ、灰カビ、葉カビなどの病気、センチチュウなどは防げないと思う。善玉菌を頼りにするしかないと思い、微生物資材はいろいろ使ってきた。土壌消毒をしない代わりに、土壌消毒と同じ金額分、菌を入れてきた。もちろん、微生物は培養できる。農家ならいくらでもある米ヌカで大量

に培養できる。

やり方は、V S トリコ (トリコデルマ菌)、V S 34 (酵母、バチルス菌、放線菌など)、V S あかきん (光合成細菌) を二対二対一になるように配合して、米ヌカを同量から倍量加える。さらに木酢の五〇〇〜七〇〇倍液を、米ヌカが軽く固まるくらいの水分量になるよう加えると、すぐに発酵が始まる。暖かい季節なら三日、寒い季節なら七日ほどで発酵熱がピークになる。これを、モミガラ堆肥に振りかけてかき混ぜる。冬でも二日で六〇度くらいまで上がる。この「善玉菌のかたまり」を畑に散布すると、圃場一面、おもに三色のパクテリアの花(菌糸)が咲く。ピンク、茶色、緑色、まるで絨毯のようになる。センチチュウは三日で消える。私は、病気やセンチチュウの気配がみえると、この善玉菌のかたまりを次作の前に入れるように



渡辺秀雄さん。トマト13aの他、タバコやブロッコリーなど。トマトは3月中旬定植で7月中旬まで収穫する作型など

している。

私のところでも、二年前に始めた六、七月植えの抑制作型で、青枯病が出てきた。この善玉菌のかたまりを入れて様子を見るつもりだ。

(新潟県胎内市)